

大学新入生の友だちとのつきあい方と満足度の推移

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 佐藤 有耕

Friendship and friendship satisfaction shifts among first-year students

Yuhkoh Satoh (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study examines friendship among first-year university students and how levels of satisfaction with new friends shift over the period from April to July. First-year students ($N=418$) were asked to complete six times a number of questionnaires, which measure satisfaction with new friends, relation-initiation skill, positive self-disclosure trait, cooperative listening role, and a two-dimensional friendship scale. The results are as follows: (1) satisfaction with new friends was higher in June than in April and May. (2) First-year students with the highest levels of satisfaction with new friends have high intimacy with friends, have a greater number of friends, and report highly on the positive self-disclosure trait and low on the cooperative listening role. (3) Relation-initiation skill is related to satisfaction with new friends in April and May, but is not related in July.

Key words: first-year university students, friendship, satisfaction

大学新入生の適応については、近年我が国で多くの研究がなされている。山田(2006)は大学新入生の意欲減退について2003年入学者を対象に、大学生活不安について2004年入学者を対象に検討している。大久保(2004)は、個人別態度構造(PAC)分析を用いて、適応感の高い学生と低い学生の比較を行い、大学環境に対して肯定的なイメージを持っているか否定的なイメージを持っているかが、主観的適応の差異を生じさせていると述べている。また水野・田積・炭谷・多胡(2007)は、大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムを検討し、授業を受けて自己理解が促進したと感ずるほどクラスへの評価が上昇すること、グループ共同作業が自己理解の促進に関連することを報告している。

大学新入生の適応に関する研究の多くは、短期縦断的手法を取っており、複数回の調査を実施している研究が多い。先に挙げた水野他(2007)では、4月上旬、6月上旬、7月下旬の3回の調査が行われ、評価不安と大学不適応が7月に高まることを報告している。飯島・川口・伊藤(1995)は、1991年入学者に対して4月、6月、9月、12月の4回の調査

を実施し、自尊感情、不安、ストレスに時系列の有意差が見られなかったことを報告している。水子・寺寄・金光(1998)は、1997年入学者に対する4月、6月、10月の3回の調査から、抑うつ・不安感情が4月においてのみ高く、以後減少し変化は少ないことを報告している。大久保・青柳(2005)は、4月と10月の2回の測定を行い、入学当初に比べて、夏期休暇後のほうが、大学において居心地良く感じており、周囲から信頼され、受容されていると感じていると述べている。広沢(2007)は、2003年入学者に4月、6月、10月の3回の調査を行い、大学適応群の受講マナーが、4月に比べて10月の時点では悪くなっていることを報告し、学習適応している新入生が半年間で大学の授業に慣れたことによる緩みの現れではないかと考察している。

学校適応を規定する要因の一つには、友人関係があげられる。大学生の不登校の背景要因を整理して論じた田中(2000)は、大学1、2年生においては、大学における友人関係への不適応感から不登校が生じることを示している。大学新入生においては、友人関係がうまくいくことと、大学適応の間には関連

があると考えられ、1990年入学者に5月と9月の2回の調査を行った梅本(1992)は、5月の時点で親密な友人がいる者は、そうでない者に比べて、大学生活に対する肯定的なイメージを抱いていることを報告している。以上のことから、大学新入生においては、新学期に上手に友人関係を築いていくことは、大学に適應していく上での一つの重要な転回点となると言えよう。

それでは、大学1年生が満足いく友人関係を新学期に築いていくには、友だちにどうかかわっていくのがよいのだろうか。積極的に自己開示していく方がよいのか、あるいは聞き役に回る方がよいのか、深いつきあい方がよいのか広いつきあい方がよいのか。また、初めての相手に上手にかかわっていくスキルはどの程度必要なのか。これらのかかわり方を中心にして、大学新入生の前期の学校生活における友だちとのつきあい方と友だち関係満足度との関連を複数回の調査から検討することを本研究の目的とした。

方 法

調査実施の手続き

2008, 2009年に関東地区の大学1校において、大学1年生を主な対象とした教職科目の講義(前期)を利用して、複数回の継続的な調査を実施した。第1回目の講義において、研究の趣旨と研究実施上の倫理的配慮に関して文書ならびに口頭で説明を行い、研究への協力を依頼した。

講義においては、ほぼ毎回課題が課され、講義の翌週に課題の提出が求められていた。課題提出用の用紙はほぼ毎回講義時間内に配付され、日付・学籍番号・学部・学科・年次・クラス・氏名の記入欄のある書式の罫紙であった。本研究で使用する質問項目は、基本的には課題提出用紙の裏面に印刷されており、教示文の下には回答が強制ではないことが明記されていた。

調査実施の日程と質問項目

本研究の実施日程(月と週は2009年の日程で表し、カッコ内には2008, 2009年の順に日付を記載した)と今回の分析に使用した変数は以下の通りであった。

#1 4月4週(4/18, 4/24): 友だち関係満足度6項目(豊田, 2003未公開より抜粋)。大学入学後の、大学の中での友人関係を回答してもらうため、「この大学に入学してからの、この大学の中での友だち関係を思い浮かべて、文の内容が今のあなたにどの

くらいあてはまるかを答えてください。」という教示文を加えた。

Kiss-18(菊地, 1988)に基づく関係開始スキル5項目。関係開始スキル項目は、今回独自に1項目を追加作成し、5項目とした。どちらの項目も、回答は「まったくあてはまらない/あまりあてはまらない/どちらともいえない/少しあてはまる/とてもあてはまる」の5件法で求めた。

#2 5月1週(4/25, 5/1): 積極的自己開示傾向5項目(佐藤, 2008)。回答は「まったくしない/あまりしない/どちらともいえない/たまにする/よくする」の5件法で求めた。

友だちとのつきあい方の2次元10項目(佐藤, 2008に深いつきあい方の2項目を追加し、選択肢を一部変更)。回答は、「まったくあてはまらない/あまりあてはまらない/どちらともいえない/少しあてはまる/よくあてはまる」の5件法で求めた。

#3 5月2週(5/9, 5/8): 協調的聞き役志向5項目(今回独自に作成)。回答は「まったくしない/あまりしない/どちらともいえない/たまにする/よくする」の5件法で求めた。

#4 5月3週(5/16, 5/15): #1の友だち関係満足度6項目。

#5 6月2週(6/13, 6/12): #1の友だち関係満足度6項目。

#6 7月1週(7/4, 7/3): #1の友だち関係満足度6項目。

調査時期と調査対象者

調査実施の時期は2008年4月~7月、及び2009年4月~7月であった。調査対象者は大学1年生418名(M159, F207, 未記入52)(18才:200, 19才:135, 20才:27, 不明56)であり、2008年入学者234名、2009年入学者184名であった。ただし、継続的な繰り返しの調査であるため、全回を通しての完全回答は得られにくく、分析ごとに対象者数は変動している。また、今回使用した変数で性差に有意差が見られたものではなく、分析はすべて男女を込みにして行った。

結 果

1. 友だち関係満足度の推移とその関連要因

a. 友だち関係満足度の推移 友だち関係満足度6項目は、佐藤(2008)と同様、因子分析(主成分分解)によって次元性が確認された(Table 1)。友だち関係満足度得点は6項目の合計得点を項目数で除して算出した(以下の分析でも同様に、使用した

得点はすべて項目数で除しており、得点範囲は1-5点となっている)。これを用いた友だち関係満足度の4時点での得点の推移 ($n = 178$) は Fig. 1 に図示した通りであり、4時点間に有意差がみられた ($F(3,483) = 4.04, p < .01; \#5 > \#4 = \#1$ (Bonferroni法, 5%水準))。#1の4月4週の時点での平均得点は3.64 ($SD = 0.71$) であり、#4の5月3週の時点では3.65(0.66)、#5の6月2週には3.79(0.63)と得点が上昇し、#6の7月1週も3.73(0.71)と3.70台を維持していた。すなわち、4月5月に比べて6月には大学に入学してからの友だち関係満足度が上昇していた。

b. 積極的自己開示傾向と協調的聞き役志向の比較
#2積極的自己開示傾向と#3協調的聞き役志向から、#4#5の友だち関係満足度へのパスを求めた重回帰分析結果では、有意なパスはどちらの時点でも得られず、#6 (Fig. 2) で自己開示傾向から小さなパス ($\beta = .19, p < .01$) が得られたのみであった。どちらかといえば、積極的に自己開示する方が、聞き役に回るよりは友だち関係の満足度を高めている可能性が示唆された。しかしそれほど強い結果ではないので、次に、積極的自己開示傾向と協調的聞き役志向の得点を組み合わせて友だち関係満足度を検討した。

#2積極的自己開示傾向5項目と#3協調的聞き役志向5項目を因子分析(主成分分解, varimax回転)し、想定通りの2因子を得た (Table 2)。「積極的自己開示傾向2.70(0.89)」と「協調的聞き役志向3.48(0.77)」をこの平均点で2分割し、得点の高低を組み合わせることで

『①積極的自己開示-聞き役志向36名』

『②積極的自己開示-非聞き役志向63名』

『③消極的自己開示-聞き役志向67名』

『④消極的自己開示-非聞き役志向52名』の4群を設定した (Fig. 3)。人数は最小となった#6の時点に記載した。この4群ごとに、#4#5#6の3回の時点の友だち関係満足度得点を比較した (Fig.

4)。#5の時点でのみ4群間に有意差 ($F(3,206) = 2.73, p < .05$) が見られたものの、多重比較での有意差は得られなかった。

c. 友だちとのつきあい方の4パターンから見た友だち関係満足度 次に、友だちとのつきあい方の4パターン(落合・佐藤, 1996)を用いて友だち関係満足度を検討することを意図して、#2友達とのつきあい方の2次元10項目を因子分析(主成分分解, varimax回転)し、「深い-浅い3.19(0.71)」「狭い-広い2.84(0.74)」の2次元を得た (Table 3)。この平均点で2分割し、得点の高低を組み合わせることで『A浅く広く58名』『B浅く狭く67名』『C深く広く62名』『D深く狭く41名』からなる友だちづきあいの4パターンを設定した (Fig. 5)。人数は最後の#6の時点に記載した。#4#5#6の3回の時点すべてで、『C深く広く』のつきあい方をする人たちの友だち関係満足度が最高得点を示した (Fig. 6) ($\#4 F(3,267) = 4.54, p < .01; C > D = A = B$) ($\#5 F(3,221) = 6.35, p < .001; C > D = A = B$) ($\#6 F(3,224) = 2.89, p < .05; C > B$)。

2. 積極的自己開示傾向と協調的聞き役志向の組み合わせで見た友だちとのつきあい方の4パターン

先の1.-b.において、人よりも自己開示する方か、人よりも聞き役に回る方かで設定した①~④と、友だちとのつきあい方の4パターンのA~Dをクロス集計して人数の偏りを検討した結果 (Table 4)、有意であった ($\chi^2(9, N = 286) = 50.65, p < .001$)。そこで残差分析を行ったところ、『①積極的自己開示-聞き役志向』では『D深く狭く』が多く、『②積極的自己開示-非聞き役志向』では『C深く広く』が多く、『③消極的自己開示-聞き役志向』では『B浅く狭く』が多かった (Fig. 7)。友だちとのつきあい方の4パターンには、積極的に自己開示するか、あるいは聞き役に回るかで見た場合に、それぞれ異

Table 1 友だち関係満足度6項目の因子分析結果(主成分分解)

	F1	h^2	平均値	SD
今の自分の友だち関係に満足している	.82	.67	3.69	(0.97)
今の友だち関係は、私が望んでいるものと違うと思う	-.81	.66	2.40	(0.98)
友だちとのつきあいがうまくいっていると感じる	.80	.64	3.64	(0.83)
今の友だち関係は自分には合わないと思う	-.75	.57	2.16	(0.87)
自分の友だち関係は今のままでいいと思う	.74	.54	3.30	(1.00)
今の友だちづきあいが本当はつらいときがある	-.70	.50	2.53	(1.13)

因子寄与3.57; 寄与率59.44%

#1: 4/18, 4/24 $n=382$

なる特徴があることが示された。この3つの結果から、積極的に自己開示する傾向は深いつきあい方と関連し、聞き役に回る傾向は狭いつきあい方と関連する（誰とでもつきあおうとする広いつきあい方にはつながらない）ことが推察された。

3. 関係開始スキル、友だちとのつきあい方の2次元を含めて検討した友だち関係満足度との関連とその推移

最後に#1関係開始スキル (Table 5)、#2積極的自己開示傾向、#3協調的聞き役志向を第1水準、#2友達とのつきあい方の2次元を第2水準に設定し、第3水準にそれぞれ#4#5#6の3回の時点における友だち関係満足度得点を置いたパス解析を行った (Fig. 8-Fig.10)。その結果、5月6月の時点と7月の時点では異なる結果が得られた。

5月6月には、積極的自己開示傾向が深いつきあい方につながるものが、友だち関係満足度の高さに

関連していた。また、関係開始スキルの高さが友だち関係満足度に直接関連していた。ところが7月の時点では、深いつきあい方から友だち関係満足度への関連も、関係開始スキルから友だち関係満足度への関連も見られなかった。その代わりに、関係開始スキルが広いつきあい方につながるものが、友だち関係満足度の高さに関連していた。

考 察

友だち関係満足度の推移 大学新入生の前期における友だち関係の満足度については、4月4週から7月1週まで一貫して中間値の3.0を0.5以上越えており、多くの大学新入生は大学での友人関係にある程度満足していると思わせる。今回の大学生から得られた記述を読むと、mixiなどのソーシャルネットサービスを用いて、入学式前から同じ学科になる学生と知り合い、待ち合わせて入学オリエンテー

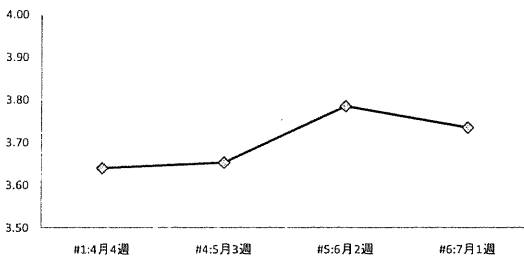


Fig. 1 大学新入生前期における友だち関係満足度の推移

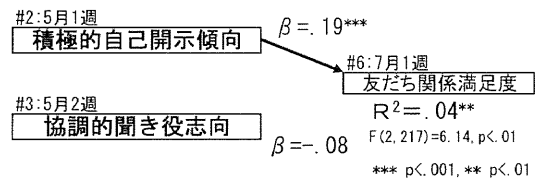


Fig. 2 積極的自己開示傾向と協調的聞き役志向からみた友だち関係満足度 (重回帰分析結果)

Table 2 友だち関係における積極的自己開示傾向5項目と協調的聞き役志向5項目の因子分析 (主成分分解) 結果

	F1	F2	h ²	平均値	SD
F1: 積極的自己開示傾向					
人前で、個人的なことをつつみかくさずに話す	.83	-.09	.69	2.79	(1.10)
人に自分の個人的な話を打ち明ける	.81	-.07	.67	2.93	(1.05)
知り合って間もないうちから、個人的なことを相手に語る	.81	-.17	.69	2.34	(1.05)
人と話すときに、最初から、素の自分を出していく	.78	-.16	.64	2.60	(1.14)
最初から、積極的に自分のことを相手にしゃべる	.75	-.26	.63	2.76	(1.10)
F2: 協調的聞き役志向					
親しくなるまでは、自分が話すより人の話を聞くようにする	-.22	.84	.75	3.41	(1.01)
知り合って間もないうちは、相手の話の聞き役にまわる	-.18	.82	.71	3.53	(0.96)
はじめのうちは、相手の話を聞いてから自分が話すようにする	-.09	.80	.65	3.56	(0.94)
自分から積極的に話すより、相手の話したいことに合わせていく	-.18	.76	.62	3.36	(0.96)
人前では、自分のことをしゃべるより人の話を聞くようにする	-.07	.71	.50	3.61	(0.95)
因子寄与	3.31	3.24			
%	33.06	32.35	65.41		

積極的自己開示傾向: 4/25, 5/1 協調的聞き役志向: 5/9, 5/8 n=290

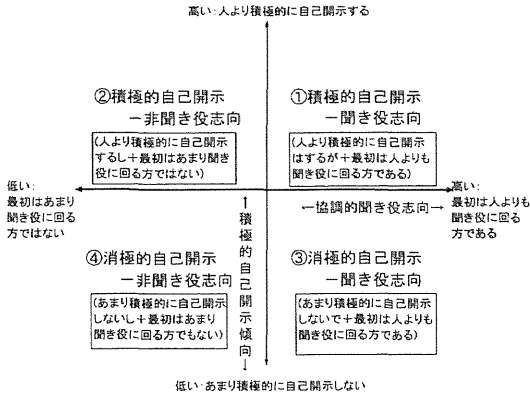


Fig. 3 積極的の自己開示傾向と協動的聞き役志向の4群

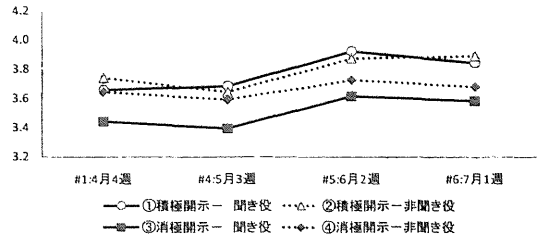


Fig. 4 積極的の自己開示と聞き役志向の組み合わせから見た友だち関係満足度の推移

Table 3 友だちとのつきあい方の2次元10項目の因子分析結果（主成分解, varimax 回転）

	F1	F2	h ²	平均値	SD
F1：深いー浅い					
友だちとは、お互いをわかりあうために本音でつきあう	.86	- 0.00	.73	3.27	(0.98)
友だちとは深く理解しあえるように心をひらいてつきあう	.77	- .09	.60	3.60	(0.97)
友だちには、自分の思っていることを正直に言う	.72	.01	.51	3.22	(0.92)
友だちには、なんでも話すようにする	.68	- .13	.48	2.86	(0.93)
友だちには、ありのままの自分を出さないようにしている	- .67	- .05	.46	2.55	(0.94)
友だちに自分のすべてを見せるのは危険である	- .65	.18	.45	3.27	(1.05)
F2：狭いー広い					
自分と気の合う人を選んで、友だちになるようにしている	.08	.77	.60	3.35	(1.00)
だれとでも友だちになるようにしている	.21	- .76	.63	3.38	(1.08)
本当の友だちになれそうな人とだけつきあうようにしている	.11	.76	.59	2.82	(1.00)
どんな友だちとも楽しくつきあっていく	.27	- .63	.47	3.42	(0.96)
因子寄与	3.31	2.21			
%	33.06	22.11	55.17		

友だちとのつきあい方 2次元 10項目：4/25, 5/1 n=324

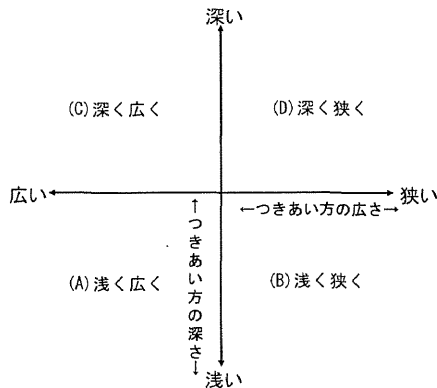


Fig. 5 友だちとのつきあい方の4パターン

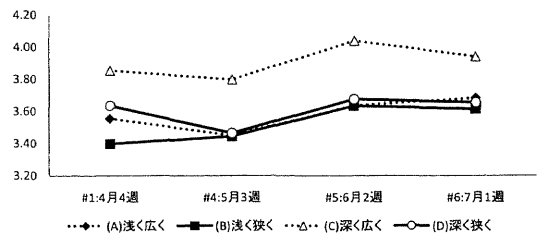


Fig. 6 友だちとのつきあい方の4パターンから見た友だち関係満足度の推移

Table 4 積極的自己開示傾向と協調的聞き役志向の4群と友だちとのつきあい方の4パターンとの対応

		(A) 浅く広く	(B) 浅く狭く	(C) 深く広く	(D) 深く狭く	合計	
①積極的自己開示 - 聞き役志向	人数	▽5	▽5	16	□19	45	45
	%	11.11	11.11	35.56	42.22	100.00	15.73
②積極的自己開示 - 非聞き役志向	人数	22	▽14	□30	20	86	86
	%	25.58	16.28	34.88	23.26	100.00	30.07
③消極的自己開示 - 聞き役志向	人数	22	□43	▽13	▽1	89	89
	%	24.72	48.31	14.61	12.36	100.00	31.12
④消極的自己開示 - 非聞き役志向	人数	18	24	17	▽7	66	66
	%	27.27	36.36	25.76	10.61	100.00	23.08
合計	人数	67	86	76	57	286	286
	%	23.43	30.07	26.57	19.93	100.00	100.00

$\chi^2(9, N = 286) = 50.65, p < .001$

残差分析の結果 (5%水準), □は期待度数以上, ▽は期待度数以下であることを示す。

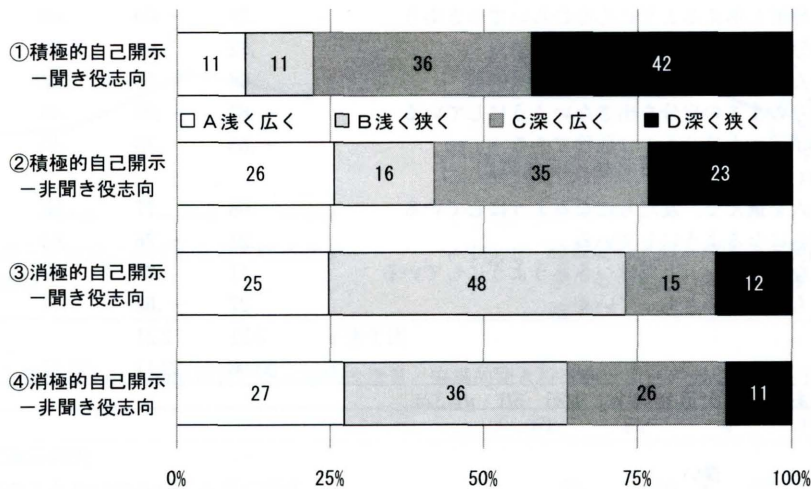


Fig. 7 自己開示傾向と聞き役志向の組み合わせで見た友だちづきあいの4パターン

Table 5 Kiss-18に基づく関係開始スキル5項目の因子分析結果 (主成分分解)

	F1	h^2	平均値	SD
知らない人とでも、すぐに会話が始められる	.86	.74	3.22	(1.16)
初対面の人に自己紹介が上手にできる	.82	.68	2.95	(1.04)
他人が話しているところに、気軽に参加できる	.80	.65	2.53	(1.09)
他人と話していて、あまり会話が途切れない	.75	.57	2.87	(1.00)
わからないことで困っても、そばの人に話しかけて聞くことができる	.68	.47	3.73	(1.05)

因子寄与 3.10 : 寄与率 62.01%

1 : 4/18, 4/24 n=390

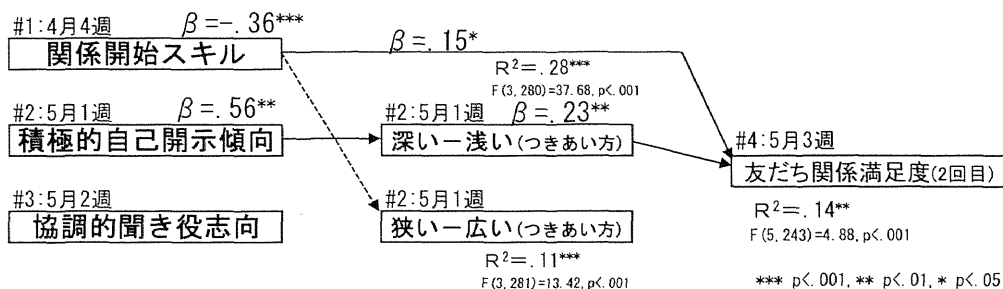


Fig. 8 各変数からの友だち関係満足度（2回目）への関連経路

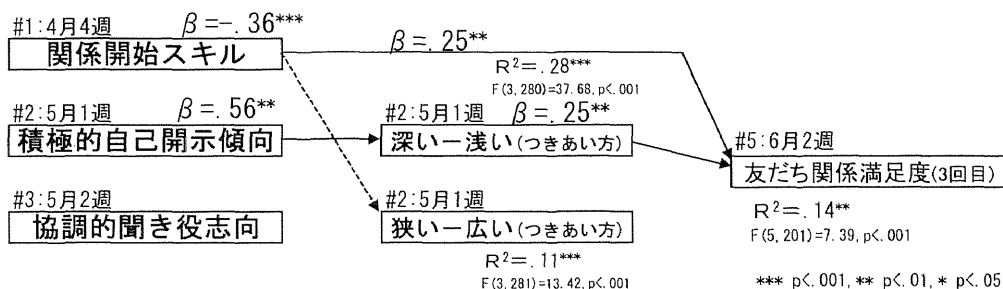


Fig. 9 各変数からの友だち関係満足度（3回目）への関連経路

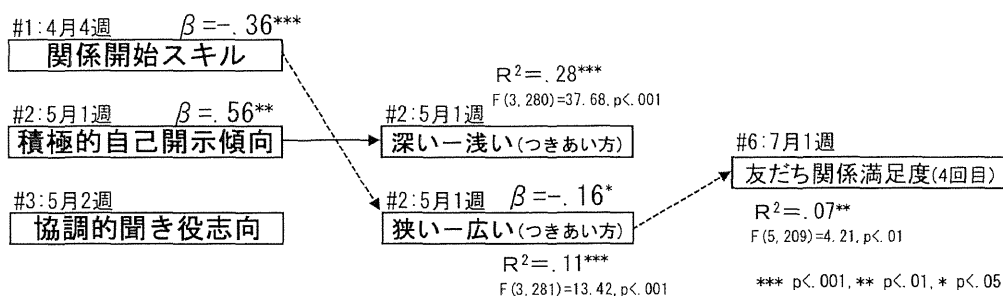


Fig. 10 各変数からの友だち関係満足度（4回目）への関連経路

ションに参加し、そのまま友人になっていく学生もいる。また、同学科・同コースの友人、サークルの友人とは別に、少人数のグループが設定される語学の授業などを通して友だちができていく。新入生にとって語学の授業は負担かもしれないが、授業の形態によっては友人関係の構築にも寄与していると考えられる。所属するゼミ・研究室のない新入生にとっては、少人数のグループが設定される授業は、友人関係の形成を間接的に支援するものとなっている可能性がある。

今回得た4時点のデータでは、6月2週が最高点を示し、4月5月に比べて得点が高くなっていた

が、7月1週には得点が若干低下しているようにも見える。6項目の中の中核的な項目「今の自分の友だち関係に満足している」の4時点の素点で見ると、3.69 → 3.69 → 3.97 → 3.86となっていた。新入生前期内の友だち関係満足度は、新入生として高揚した気分の中でピークを迎えた後、ゆるやかな低下を見せ、平常な状態に戻ると考えられよう。

満足度の高い友人関係の規定因 大学新入生の前期に限って言えば、人よりも積極的に自己開示をして、最初はあまり聞き役に回る方ではない(②)場合に、深く広くの友だちつきあい(C)をする傾向があり、この(C)の場合に友だち関係満足度は最

も高くなる。しかし、Fig. 7の(C)深く広くと(D)深く狭くの2つのパターンを合計した比率を見ると、①積極的自己開示-聞き役志向では78%であり、②積極的自己開示-非聞き役志向では58%である。したがって、深いつきあいが占める割合の高さを考慮すると、人よりも積極的に自己開示はするが、なおかつ最初は人よりも聞き役に回る方でもある(①)場合がむしろ、深い関係を築くことにつながりやすいと考えられる。この積極的に自己開示する傾向と聞き役に回る傾向が共に高い①の場合、深く狭くの友だちつきあい(D)が多くなっており、この(D)の場合、(選択された少数の相手との深いつきあいであるため)互恵的な関係がより成立しやすくなる可能性が示唆される。

日常的な実感と合致する結論に過ぎないが、積極的に自己開示することと、協調的に相手の話を聞くことの両方が友だちとの親密で良好な関係を築いていくのに必要だということになろう。積極的に自己開示する傾向は深いつきあい方と関連し、聞き役に回る傾向は狭いつきあい方(広いつきあい方ではないつきあい方)と関連し、両方が高い場合に深く狭くの友だちつきあいが多くなり、互恵的な関係が成立しやすくなると考えられた。

関係開始スキルの影響 また、他者と上手に関係を開始するスキルは、5月6月までは友だち関係の満足度に直接関連するが、7月には直接の関連は見られなくなる。友だちづくりが苦手だという学生もいるが、初対面の他者と上手にかかわっていくスキルの高さは、前期の終わり頃には友だち関係の満足度に直接的な影響は与えないことが示された。

文 献

- 広沢俊宗(2007). 大学新入生の適応に関する研究(I): 学習面での適応-不適応に関わる諸変数の検討 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138.
- 飯島婦佐子・川口祐貴子・伊藤 彩(1995). 大学新入生の適応に関する追跡的研究 性格心理学研究, 3, 37-50.
- 菊池章夫(1988). 思いやりを科学する: 向社会的行動の心理とスキル 川島書店

- 水野邦夫・田積 徹・炭谷将史・多胡陽介(2007). 大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムの検討 聖泉論叢, 15, 125-140.
- 水子 学・寺崎正治・金光義弘(1998). 日常生活における対人相互作用と感情との関連: 大学新入生の適応に関する追跡調査 川崎医療福祉学会誌, 8, 65-72.
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 大久保智生(2004). 新入生における大学環境への主観的適応に関するPAC(個人別態度構造)分析 パーソナリティ研究, 13, 44-57.
- 大久保智生・青柳 肇(2005). 大学新入生の適応に関する研究: 社会的スキルは後の適応を予測するのか? 人間科学研究, 18, 207-213.
- 佐藤有耕(2008). 大学生の新学期内での友人関係満足度の推移 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 340.
- 田中健夫(2000). 大学生にとっての不登校 小林哲朗・高石恭子・杉原保史(編著)大学生がカウンセリングを求めるとき: こころのキャンパスガイド ミネルヴァ書房 pp.141-160.
- 豊田瀬里乃(2004). 対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析 平成15年度筑波大学人間学類卒業論文(未公刊)
- 梅本信章(1992). 大学新入生の適応について: 自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連 盛岡大学紀要, 11, 27-38.
- 山田ゆかり(2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.

付 記

本稿は、日本発達心理学会第20回大会(2010)において発表した内容に加筆したものである。調査の計画に際し、筑波大学人間学類(当時)・藤田裕実さんから示唆を得た。またデータ入力に際し、思春期・青年期研究会の長谷晶子さんの協力を得た。記して感謝する。

(受稿3月23日: 受理4月30日)